

兵庫県持続性の高い農業生産方式導入指針

平成31年3月

兵庫県農政環境部
農林水産局農業改良課

目 次

第1	持続性の高い農業生産方式の内容	
1	水稲	1
2	麦	2
3	大豆(黒大豆を含む)	3
4	小豆	4
5	そば	5
6	たまねぎ	6
7	キャベツ	7
8	レタス(非結球を含む)	8
9	はくさい	9
10	ブロッコリー	10
11	ピーマン	11
12	なす	12
13	だいこん	13
14	かぶ	14
15	やまのいも	15
16	枝豆(黒大豆を含む)	16
17	トマト(長段どり含む)	17
18	ミニトマト	18
19	いちご	19
20	きゅうり	20
21	ほうれんそう	21
22	こまつな	22
23	みずな	23
24	しゅんぎく	24
25	ベビーリーフ(若獲り、主に摘み取りの施設軟弱野菜)	25
26	チンゲンサイ	26
27	モロヘイヤ	27
28	エンサイ(クウシンサイ)	28
29	その他漬け菜類(しろな、晩生菜、山東菜(べかなを含む))	29
30	ねぎ	30
31	アスパラガス	31
32	メロン	32
33	すいか	33
34	カリフラワー	34
35	ばれいしょ	35
36	にんじん	36
37	スイートコーン	37

38	かぼちゃ	38
39	ズッキーニ	39
40	オクラ	40
41	パセリ	41
42	ふき	42
43	アマランサス	43
44	ごま	44
45	うど	45
46	にんにく	46
47	さやいんげん	47
48	実えんどう	48
49	ナタ豆	49
50	さといも	50
51	かんしょ	51
52	ジネンジョ	52
53	ごぼう	53
54	れんこん	54
55	とうがらし類	55
56	にがうり	56
57	アイスプラント	57
58	温州みかん	58
59	中晩生柑橘類 (不知火、いよかん、はっさく等)	59
60	なし	60
61	くり	61
62	いちじく	62
63	ぶどう	63
64	びわ	64
65	もも	65
66	かき	66
67	うめ	67
68	ブルーベリー	68
69	茶	69
70	きく	70
71	カーネーションおよびバラ	71
72	その他露地切り花	72
73	その他施設切り花	73
74	切り枝花木	74
75	鉢花、花壇用苗物	75
76	飼料用イネ	76

第2	持続性の高い農業生産方式の導入の促進を図るための措置に関する事項	
1	土壌診断の励行	77
2	きめ細やかな施肥の実施	77
3	入念な観察に基づく的確な防除の実施	77
第3	その他必要な事項	
1	土壌の性質の総合的な改善	78
2	必要な機械、資材等及び資金の調達	78
3	関係補助事業の積極的な活用	78
第4	持続性の高い農業生産方式の定義等について	78

第1 持続性の高い農業生産方式の内容

1 水稲

水稲は、県北部でコシヒカリが、県南部でキヌヒカリ、ヒノヒカリ、山田錦が栽培されている。土づくりは、稲わらのすきこみ、土づくり肥料の施用のほか、牛ふんたい肥等の適正施用を行っていくことが必要である。また、施肥は、有機質肥料や肥効調節型肥料の施用と局所施肥を組み合わせ、施肥効率の向上と収量の安定を図ることが必要である。

病害虫防除は、発生予察等を活用し、種子伝染性病害虫については温湯種子消毒技術を利用する。カメムシ類については機械除草技術により発生の抑制を図り、農薬の適正使用に努め使用回数の節減を図る。

雑草対策は、アイガモ・再生紙マルチ・機械除草等を活用して、除草剤の使用を少なくしていく。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 連用年数により施用量を加減する。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物の利用 		1～2t/10a（牛ふんたい肥の場合） 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 肥効調節型肥料を施用する。 ○ 局所施肥技術による施肥を行う。 ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料含む）を使用する。 		化学窒素成分量 8.5kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 温湯種子消毒技術	ばか苗病、ごま葉枯病、いもち病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、イネシガレセンチュウ	
	○ 機械除草技術	雑草、カメムシ類	
	○ 除草用動物利用技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	ばか苗病、ごま葉枯病、いもち病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	褐条病、立枯細菌病、もみ枯細菌病、ゴブノメカ、カメムシ、フタホコヤカ、イネトコイシ	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	<p>化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。</p> <p>カメムシ類防除対策として機械除草する場合は、畦畔除草を出穂2週間前までに行い、出穂期に畦畔除草は行わない。</p>		

2 表

麦栽培のうち小麦が全体の約8割を占め、麦茶用として六条大麦、麺用としてはだか麦が栽培されている。土づくりは、稲わら等有機質資材や土壌改良材を施用し、土壌の排水性の向上に努める。また、施肥は、肥効調節型肥料の施用と局所施用を組み合わせ、施肥効率の向上と収量の安定と品質の向上を図ることが必要である。

病害虫防除は、温湯種子消毒技術を利用し、化学農薬の使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物の利用 		1～2t/10a（牛ふんたい肥の場合） 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施用技術による施肥を行う。 ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料含む）を使用する。 		化学窒素成分量 11kg /10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	温湯種子消毒技術	腥黒穂病、斑葉病、裸黒穂病	
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

3 大豆（黒大豆を含む）

大豆は、普通大豆が播磨地域で、黒大豆が丹波、但馬播磨地域で多く栽培されている。

大豆は特に地力を消耗するので、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料の施用を基本とし、肥効調節型肥料の局所施用を組み合わせ、施肥効率の向上と収量の安定を図ることが必要である。

病虫害防除は、発生予察を活用しながら、フェロモン剤や生物農薬を利用し、化学農薬の使用回数の節減を図っていく。また、雑草対策は、機械による中耕培土を中心に行い、除草剤の使用を少なくしていく。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安	
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物の利用 		1～2t /10a（牛ふんたい肥の場合） 全量還元 全量還元	
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料を有効活用する。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 普通大豆 6kg /10a以下 黒大豆 8kg /10a以下	
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		対象病虫害等	
	○ 機械除草技術			雑草、カメムシ類
	○ 生物農薬利用技術			ハスモンヨトリ
	○ 天然物質由来農薬利用技術			ハダニ類
	○ 光利用技術（光反射テープ）			ウイルス病、アブラムシ類
○ フェロモン剤利用技術		ハスモンヨトリ		
その他の 留意事項	<p>化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。</p> <p>肥よく地では、窒素を無施用とする。追肥は、生育に応じて開花時期を中心に施用する。</p> <p>カメムシ類防除対策として機械除草する場合は、開花前に実施する。</p>			

4 小豆

小豆は、中播磨、但馬、丹波地域で主に栽培されている。土づくりは、高品質安定多収のため、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図る。施肥は、有機質肥料の施用を基本とし、肥効調節型肥料の局所施肥を組み合わせた施肥効率の向上と収量の安定を図ることが必要である。

病害虫防除は、発生予察を活用しながら光反射テープ等の光利用技術を導入し、化学農薬の使用回数全体の節減を図っていく。また、雑草対策は、機械による中耕培土を中心に行い、除草剤の使用を少なくしていく。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物の利用 		1～2t/10a (牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 6kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	雑草、カメムシ類、ハダニ類	
	○ 生物農薬利用技術	ハスモンヨトウ	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	ハダニ類	
	○ 光利用技術（光反射テープ）	ウイルス病、アブラムシ類	
○ フェロモン剤利用技術	ハスモンヨトウ		
その他の 留意事項	<p>化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。</p> <p>肥よく地では、窒素を無施用とする。追肥は、生育に応じて開花時期を中心に施用する。</p> <p>機械除草技術としてカメムシ類を防除する場合は、ほ場周辺のマメ科雑草を除去する。</p>		

5 そば

そばは、土地利用型の転作作物として県内各地で栽培されており、地域特産物として主に地域内流通されている。土づくりは、明きよ、暗きよ等による排水対策のほか、たい肥を中心とした有機質資材や土壌改良材を施用し、土壌の物理性を高め、排水性の向上に努める。また、施肥は、有機質肥料の施用と肥効調節型肥料の局所施用を組み合わせ、施肥効率の向上と収量の安定と品質の向上を図ることが必要である。

病害虫防除は、生物農薬を利用し化学農薬の使用回数全体を節減し、雑草対策は、機械除草を行い化学農薬の使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 連用年数により施用量を加減する。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1～2t/10a(牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 基肥として肥効調節型肥料を施用する。 ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料含む）を使用する。 		化学窒素成分量 3kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 (BT剤の利用) 	雑草 ハスモンヨトウ	
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。 肥よく地では、窒素を無施用とする。		

6 たまねぎ

たまねぎは、淡路地域を主体に栽培されている。水田裏作を基本にしているが、レタス等との多毛作や化学肥料の連用から、土壌の化学性・物理性の悪化がみられる地域も現れてきている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図る。施肥は、有機質肥料等の施用による施肥技術の改善を進め化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生予察を活用し化学農薬の使用回数全体を節減する。雑草対策は、機械除草を行い化学農薬の使用回数の削減を図る。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1～2t/10a（牛ふんたい肥の場合） 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料含む）施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 25kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	ハダニ類、灰色かび病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類	
	○ フェロモン剤利用技術	ハスモンヨトウ	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

7 キャベツ

キャベツは、神戸、明石、淡路地域を主体にほぼ県内全域で栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、ハイマダラノメイガ、アブラムシ類は苗床の寒冷紗被覆で、コナガ、ハスモンヨトウはフェロモン剤や生物農薬利用により発生抑制し、機械除草による雑草抑制等により、化学農薬使用の削減に努める。また、光利用技術、マルチ栽培技術も活用する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1～2 t/10a (牛ふん たい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料 (有機入り化成肥料を含む) 施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 40kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	ハスモンヨトウ、コナガ	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	根こぶ病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	コナガ、アブラムシ類、アオムシ、アザミウマ類、タナギンウバ、ハイマダラノメイガ、ヨトウムシ	
	○ 光利用技術 (黄色等灯、光反射テープ)	アブラムシ類、ヨトウムシ類	
	○ 被覆栽培技術 (苗床被覆)	ハイマダラノメイガ、アブラムシ類	
	○ フェロモン剤利用技術	ハスモンヨトウ、コナガ	
○ マルチ栽培技術	べと病、菌核病、雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね 2 割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。 根こぶ病対策として、排水改善と pH 調整、大ポット育苗も有効である。		

8 レタス（非結球を含む）

レタス栽培は、淡路地域が主体で、和泉砂岩層の土壌条件を活かした一大レタス産地を形成している。土づくりは、連作による収量や品質の低下を防ぐため、たい肥等土づくりを徹底し、地力の維持増進を進めることが重要である。施肥は、マルチ栽培の導入や肥効調節型肥料、有機質肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、被覆栽培技術やフェロモン剤、生物農薬利用技術、マルチ栽培、光利用技術、熱利用土壌消毒技術により化学農薬使用回数の削減に努め、産地の維持拡大を図る。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1～2t/10a(牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 20kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 生物農薬利用技術	オオハコガ	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	ビクグベイン病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	ハモグリバエ類、オオハコガ、ヨウムシ、うどんこ病、アブラムシ類、コジラミ類	
	○ 熱利用土壌消毒技術（太陽熱利用）	ビクグベイン病	
	○ 光利用技術（黄色等灯、光反射テープ）	アブラムシ類、ヨウムシ類、オオハコガ	
	○ 被覆栽培技術（べたがけ栽培技術、トンネル栽培技術）	アブラムシ類、シロイモシヨウ、オオハコガ	
	○ フェロモン剤利用技術	ハスモンヨウ、オオハコガ	
○ マルチ栽培技術	灰色かび病、すそ枯病、菌核病、ビクグベイン病、雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

9 はくさい

はくさいは、神戸、淡路地域で主に栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図る。施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料の施用により、化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、ハイマダラノメイカ、アブラムシ類は苗床の寒紗被覆で、コナガ、ヨトウムシ類はフェロモン剤や生物農薬を使用し、機械除草による雑草抑制等により、化学農薬使用回数の削減に努める。また、光利用技術、マルチ栽培技術も活用する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1～2 t/10a (牛ふん たい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 35kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	コナガ、アオムシ、ヨトウムシ、軟腐病	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	根こぶ病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アオムシ、コナガ、ハイマダラノメイカ、ヨトウムシ、アオムシ、うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類	
	○ 光利用技術（黄色等灯、光反射テープ）	アブラムシ類、ヨトウムシ類	
	○ 被覆栽培技術（苗床被覆）	ハイマダラノメイカ、アブラムシ類、コナガ	
	○ フェロモン剤利用技術	コナガ、ハスモンヨトウ	
○ マルチ栽培技術	黒斑病、白斑病、雑草		
その他の 留意事項	<p>化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね 2 割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。</p> <p>根こぶ病対策として、抵抗性品種、排水改善と pH 調整、大ポット育苗も有効である。</p>		

10 ブロッコリー

ブロッコリーは、神戸、明石、淡路地域で主に栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図る。施肥は、有機質肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、ハイマダラノメイガ、アブラムシ類は苗床の寒冷紗被覆で、コナガ、ヨトウムシ類はフェロモン剤、生物農薬を利用し、機械除草による雑草抑制等により、化学農薬使用回数の削減に努める。また光利用技術、マルチ栽培技術も活用する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1～2 t/10a (牛ふん たい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 30kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 物農薬利用技術	コナガ、アオムシ、ヨトウムシ、ハスモンヨトウ	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	根こぶ病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	コナガ、アオムシ、アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類	
	○ 光利用技術（光反射テープ）	アブラムシ類	
	○ 被覆栽培技術（苗床被覆）	ハイマダラノメイガ、アブラムシ類、ヨトウムシ類、コナガ	
	○ フェロモン剤利用技術	コナガ	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。 根こぶ病対策として、排水改善とpH調整、大ポット育苗も有効である。		

11 ピーマン

ピーマンは、但馬地域を主産地としてほぼ全域で栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料の施用や局所施肥技術の活用により化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、アブラムシ類や雑草対策に効果のある光反射マルチや疫病や青枯病抵抗性品種の導入により、化学農薬使用回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 ○ 稲わら等のすき込み 		1～2 t/10a (牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施肥技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 40kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 生物農薬利用技術	ハスモンヨトウ、オオタバコガ、アザミウマ類、ハダニ類、アブラムシ類	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	疫病、青枯病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	コナジラミ類、ハダニ類、アザミウマ類、オオタバコガ、モザイク病感染防止、うどんこ病、アブラムシ類	
	○ 光利用技術（光反射フィルムマルチ、光反射テープ）	アブラムシ類	
	○ 被覆栽培技術（サイド等防虫ネット被覆）	ハスモンヨトウ、オオタバコガ、アブラムシ類、アザミウマ類	
	○ フェロモン剤利用技術	ハスモンヨトウ、オオタバコガ	
○ マルチ栽培技術	ウイルス病、疫病、雑草、灰色かび病		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

1.2 なす

なすは、水田を利用し、ほぼ県内全地域で栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料の施用や局所施肥技術により化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、生物農薬の利用やマルチ栽培により、化学農薬使用回数の削減に努める。また、光反射テープ、太陽熱を利用した土壤消毒や抵抗性品種の導入を進める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1～2 t/10a (牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施肥技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 60kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 機械除草技術	雑草、ネリムシ類、ハダニ類、ミミズ、アザミヤ	
	○ 生物農薬利用技術	オオタバコガ、灰色かび病、アザミヤ類、アブラムシ類、コシジラミ類、ハモグリバエ類、ハダニ類	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	青枯病、半枯病、半身萎凋病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アブラムシ類、アザミヤ類、ハダニ類、コシジラミ類、ハモグリバエ類、チャノコリガニ、オオタバコガ、うどんこ病、テントウムシ類	
	○ 土壤還元消毒技術	半身萎凋病	
	○ 熱利用土壤消毒技術(太陽熱利用)	ネオブセンチュウ、菌核病	
	○ 光利用技術(光反射テープ、光反射フィルムマルチ、紫外光照射)	アブラムシ類、ミミズ、アザミヤ、すしかび病、灰色かび病	
	○ 被覆栽培技術(防虫ネット)	オオタバコガ、アブラムシ類	
	○ フェロモン剤利用技術	オオタバコガ	
○ マルチ栽培技術	灰色かび病、雑草		
その他の留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壤診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

1.3 だいこん

だいこんは、たつの市御津町、加西市で栽培されている。また、但馬地域では、準高冷地の立地を活用して夏秋どりの大根が栽培されている。土づくりは、連作による収量や品質の低下を防ぐため、たい肥等土づくりを徹底し、地力の維持増進を進めることが重要である。また、施肥は、有機質肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、コナガはフェロモン剤、生物農薬利用で、マルチ栽培、機械除草により雑草を抑制する等、化学農薬使用回数の削減に努める。また、光反射マルチや抵抗性品種の導入を進める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は播種2～3ヶ月前に全量すき込む。 		1～2 t/10a (牛ふんたい肥の場合) 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 (秋冬どり、春どり) 20kg/10a 以下 (高原夏秋どり) 15kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		対象病害虫等
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	コナガ、アオムシ、ヨウムシ、軟腐病	
	○ 対抗植物利用技術(エン麦)	キスジノミハシ	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	萎黄病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	コナガ、アオムシ、うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類	
	○ 光利用技術(光反射マルチ、光反射テープ)	キスジノミハシ、アブラムシ類	
	○ 被覆栽培技術(べたがけ栽培、防虫ネット)	キスジノミハシ、コナガ、アオムシ	
	○ フェロモン剤利用技術	コナガ	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

1.4 かぶ

かぶは、神戸市及び養父市大屋町で主に栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用や緑肥作物の作付けにより地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料の施用により、化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、根こぶ病は排水を良くし土壌pHを矯正し、アブラナ科類の連作を避け、アブラナ科雑草を除去することにより発生を抑える。また、アブラムシ類は光反射テープをうね上に張り発生を抑え化学農薬使用回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 ○ 稲わら等のすき込み 		1~2 t/10a (牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 (露地) 20kg/10a 以下 (施設) 16kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 機械除草技術	雑草、ネリムシ類	
	○ 生物農薬利用技術	ハイダ [®] ラノメカ [®]	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	根こぶ病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	ハダ [®] リハ [®] エ類、うどんこ病、アブラムシ類、ハダ [®] ニ類、コナ [®] ラミ類	
	○ 熱利用土壌消毒技術(太陽熱利用、熱水利用)	キスジ [®] ノミハムシ、アブラムシ類	
	○ 光利用技術(光反射テープ)	アブラムシ類	
	○ 被覆栽培技術(サイト [®] 等防虫ネット被覆、べたがけ栽培、雨よけ栽培)	ハスモンヨトウ、アブラムシ類、キスジ [®] ノミハムシ、コガ [®]	
	○ フェロモン剤利用技術	ハスモンヨトウ、コガ [®]	
○ マルチ栽培技術	雑草、白さび病、根こぶ病		
その他の留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

15 やまのいも

やまのいもは、水田を活用した特産物として丹波地域を中心に栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、マルチ栽培による雑草抑制や機械除草等の他、光利用技術によるコガネムシ類の防除で化学農薬使用の回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 		1～2 t/10a (牛ふんたい肥の場合) 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料 (有機入り化成肥料を含む) 施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 25kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	畦畔生息害虫	
	○ 生物農薬利用技術	ハダニ類、シロイモシヨウ等	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	ハダニ類	
	○ 光利用技術 (青色灯) (光反射テープ)	コガネムシ類 (誘殺) アブラムシ類	
	○ フェロモン剤利用技術	シロイモシヨウ等	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

16 枝豆（黒大豆を含む）

枝豆は転作作物としてほぼ県内全域で栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、機械除草による雑草抑制や光反射テープの利用等により、化学農薬使用回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み 		1～2 t/10a（牛ふんたい肥の場合） 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 3kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	雑草、ネリムシ類	
	○ 生物農薬利用技術	うどんこ病、アブラムシ類	
	○ 光利用技術（光反射テープ）	アブラムシ類	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	うどんこ病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類、アブラムシ類	
○ フェロモン剤利用技術	ハスモンヨトウ		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね 2 割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

17 トマト（長段どり含む）

トマトは、施設野菜の主力作物としてほぼ県内全域で栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぐため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、ヨトウムシ類等は開口部や側面等の防虫ネットの被覆により飛来を抑制する。灰色かび病、疫病はPVAフィルムの内張りを活用する。また、コナジラミ類等は防虫ネット被覆による進入防止や生物農薬、ラノーテープを利用して発生を抑えることにより、化学農薬使用回数の削減に努める。また、光反射マルチ、太陽熱を利用した土壌消毒や抵抗性品種の導入を進める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1~2t/10a(牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施肥技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 30kg/10a 以下 ただし長段どり 48kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		対象病虫害等
	○ 温湯種子消毒技術	かいよう病	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	ネオブセンチュウ、コナジラミ類、ハスモンヨトリ、灰色かび病、ハモグリバエ類、オタバコガ、アブラムシ類	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	ウイルス病、ネオブセンチュウ、青枯病、萎凋病、根腐萎凋病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	コナジラミ類、トマトビダニ、ハモグリバエ類、アザミユマ類、オタバコガ、うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、モザイク病感染防止	
	○ 土壌還元消毒技術	灰色かび病、菌核病、萎凋病、根腐萎凋病、雑草	
	○ 熱利用土壌消毒技術	灰色かび病、疫病、菌核病	
	○ 光利用技術（光反射フィルムマルチ、光反射テープ、ラノーテープ、黄色等灯、紫外線カットフィルム、粘着資材、紫外光照射）	アブラムシ類、ヒラズ、ハナアザミユマ、オタバコガ、コナジラミ類、灰色かび病、菌核病、うどんこ病	
	○ 被覆栽培技術（ネット等防虫ネット被覆、PVAフィルムの内張り）	ハスモンヨトリ、アブラムシ類、コナジラミ類、ハモグリバエ類、オタバコガ、灰色かび病、疫病	
○ フェロモン剤利用技術	ハスモンヨトリ、オタバコガ		
○ マルチ栽培技術	菌核病、灰色かび病、ハモグリバエ類		
その他の 留意事項	施肥量は土壌診断により決定する。 化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。 なお、長段どりとは「11段以上、かつ栽培期間180日以上」のものとする。		

18 ミニトマト

ミニトマトは、ほぼ県内全域で栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぐため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、ヨトウムシ類等は開口部や側面等の防虫ネットの被覆により飛来を抑制する。灰色かび病、疫病はPVAフィルムの内張りを活用する。また、コナジラミ類等は防虫ネット被覆による進入防止や生物農薬、ラノーテープを利用して発生を抑えることにより、化学農薬使用回数の削減に努める。また、光反射マルチ、太陽熱を利用した土壌消毒や抵抗性品種の導入を進める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1~2t/10a(牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施肥技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 (半促成) 20kg/10a 以下 (抑制) 13kg/10a 以下 (促成) 15kg/10a 以下 (露地) 20kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		対象病虫害等
	○ 温湯種子消毒技術		かいよう病
	○ 機械除草技術		ハダニ類、トマトサビダニ
	○ 生物農薬利用技術		ネオブセンチュウ、コナジラミ類、ハスモンヨトウ、灰色かび病、ハメグリハエ類、オタハコガ
	○ 抵抗性台木利用技術		青枯病、ネオブセンチュウ
	○ 天然物質由来農薬利用技術		コナジラミ類、トマトサビダニ、ハメグリハエ類、アザミウマ類、オタハコガ、うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、モザイク病感染防止
	○ 土壌還元消毒技術		灰色かび病、菌核病、萎凋病、根腐萎凋病、雑草
	○ 熱利用土壌消毒技術		灰色かび病、疫病、菌核病
	○ 光利用技術(光反射フィルムマルチ、光反射テープ、ラノーテープ、黄色等灯、紫外線カットフィルム、粘着資材)		アブラムシ類、ヒラズハアザミウマ、オタハコガ、コナジラミ類、灰色かび病、菌核病、アザミウマ類
	○ 被覆栽培技術(サイト等防虫ネット被覆、PVAフィルムの内張り、寒冷紗、雨除け栽培)		アブラムシ類、コナジラミ類、ハメグリハエ類、オタハコガ、灰色かび病、疫病、かいよう病
○ フェロモン剤利用技術		ハスモンヨトウ、オタハコガ	
○ マルチ栽培技術		菌核病、灰色かび病、ハメグリハエ類、雑草	
その他の 留意事項	<p>施肥量は土壌診断により決定する。</p> <p>化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。</p>		

19 いちご

施設いちごは、ほぼ県内全域で栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぐため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用や緑肥作物の作付けにより地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料や肥効調節型肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、防虫ネットの被覆や育苗期の雨除け、天敵、B T剤利用、マルチ栽培により化学農薬使用回数の削減に努める。また、光反射テープの利用や太陽熱を利用した土壤消毒を活用する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 ○ 緑肥を栽培する場合は全量施肥前にすき込む。 		1～2t/10a（牛ふんたい肥の場合）
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 元肥は有機質肥料（有機入り化成肥料含む）または肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 20kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	ハダニ類、ミカンキイロアザミウマ、コガネムシ類	
	○ 生物農薬利用技術	ハダニ類、アブラムシ類、ハスモンヨトリ、アザミウマ類、うどんこ病、灰色かび病、炭そ病	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	炭疽病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アブラムシ類、ハダニ類、アザミウマ類、うどんこ病、コジラミ類、シクラカホリダニ	
	○ 土壤還元消毒技術	萎黄病、雑草	
	○ 熱利用土壤消毒技術	萎黄病、ネグサレセンチュウ、炭そ病	
	○ 光利用技術（光反射テープ、粘着資材、紫外光照射）	アブラムシ類、コジラミ類、うどんこ病	
	○ 被覆栽培技術（サイド等防虫ネット被覆、育苗期の雨除け栽培）	ハスモンヨトリ、アブラムシ類、ミカンキイロアザミウマ、土壤病害 炭そ病	
○ フェロモン剤利用技術	ハスモンヨトリ		
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	<p>化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壤診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。</p> <p>完熟牛ふんたい肥等とは、物理性、化学性を改善するための有機質資材（くん炭、ピートモス等）を含む。</p>		

20 きゅうり

きゅうりは、施設ではトマト等との輪作で、県南部地域を中心に栽培されている連作による収量や品質の低下を防ぐため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、ウリハムシ、アブラムシ類等は開口部や側面等の防虫ネットの被覆や天敵利用、マルチ栽培を利用して発生を抑えることにより、化学農薬使用回数の削減に努める。また、光反射マルチ、太陽熱を利用した土壌消毒や抵抗性品種の導入を進める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1~2 t/10a (牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 (施設) 40kg/10a 以下 (露地) 40kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		
	○ 機械除草技術	ハダニ類、ミナキイロアザミウマ	
	○ 生物農薬利用技術	コシジラミ類、ウリノメイガ、アブラムシ類	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	つる割病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アブラムシ類、アザミウマ類、うどんこ病、ハダニ類、ハモグリハエ類、ホシツコシジラミ、コシジラミ類	
	○ 熱利用土壌消毒技術	つる割病、白絹病、菌核病	
	○ 光利用技術（光反射フィルムマルチ、光反射テープ、紫外線カットフィルム、粘着資材）	ウリハムシ、アブラムシ類、アザミウマ類	
	○ 被覆栽培技術（サイド等防虫ネット被覆技術）	ウリハムシ、ミナキイロアザミウマ、アブラムシ類、コシジラミ類	
○ マルチ栽培技術	雑草、疫病、菌核病		
その他の 留意事項	<p>施肥量は土壌診断により決定する。</p> <p>化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。</p>		

2.1 ほうれんそう

ほうれんそうは、軟弱野菜の主力作物のひとつとして、ほぼ県内全域で栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぐため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、ヨトウムシ類等は開口部や側面等の防虫ネットの被覆により飛来を抑制する。また、フェロモン剤を利用してシロイチモジヨトウの発生を抑えることにより、化学農薬使用回数の削減に努める。また、光反射テープ、太陽熱を利用した土壌消毒や抵抗性品種の導入を進める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1~2 t/10a (年間 3t) (牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 (露地) 20kg/10a 以下 (施設) 15kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 生物農薬利用技術	ヨトウムシ、ハモンヨトウ	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	べと病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類、アシガリハモグリハエ、シロビノメイガ	
	○ 土壌還元消毒技術	萎凋病	
	○ 熱利用土壌消毒技術	萎凋病、株腐病、立枯病、疫病	
	○ 光利用技術(光反射テープ)	アブラムシ類	
	○ 被覆栽培技術(サイド等防虫ネット被覆、べたがけ栽培技術)	ヨトウムシ類	
○ フェロモン剤利用技術	シロイチモジヨトウ		
その他の留意事項	<p>2作目以降の施肥量は土壌診断により減量する。</p> <p>化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね 2 割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。</p>		

2.2 こまつな

こまつな栽培は、軟弱野菜の主力作物として近年栽培が増加し、ほぼ県内全域で栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぐため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料施用により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、アブラムシ類等は開口部や側面等の防虫ネットの被覆で、コナガはフェロモン剤、BT剤利用により発生を抑制することにより、化学農薬使用回数の削減に努める。また、萎黄病は太陽熱利用による土壌消毒で発生を抑える。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1～2 t/10a (年間 3t) (牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料 (有機入り化成肥料を含む) 施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 (露地) 20kg/10a 以下 (施設) 8 kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 生物農薬利用技術	コナガ、アオムシ、ヨトウムシ	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	白さび病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アブラムシ類、アオムシ、うどんこ病、ハダニ類、コナジラミ類	
	○ 熱利用土壌消毒技術	萎黄病、キスジノミハムシ	
	○ 光利用技術 (光反射テープ、粘着資材)	アブラムシ類、コナジラミ類	
	○ 被覆栽培技術 (サイト等防虫ネット被覆、べたがけ栽培)	アブラムシ類、キスジノミハムシ、ヨトウムシ、コナガ、アオムシ	
○ フェロモン剤利用技術	コナガ		
その他の 留意事項	2作目以降の施肥量は土壌診断により減量する。 化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

2.3 みずな

みずな栽培は、軟弱野菜の主力作物として近年栽培が増加し、ほぼ県内全域で栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぐため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料施用により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、アブラムシ類等は開口部や側面等の防虫ネットの被覆で、コナガはフェロモン剤、B T剤利用により発生を抑制することにより、化学農薬使用回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1～2 t/10a (年間 3t) (牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 (露地) 20kg/10a 以下 (施設) 8 kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 生物農薬利用技術	コナガ、アオムシ、ヨトウムシ	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	コナガ、うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類	
	○ 光利用技術(光反射テープ、粘着資材)	アブラムシ類、コナジラミ類	
	○ 被覆栽培技術(シート等防虫ネット被覆、べたがけ栽培)	アブラムシ類、キスジノミハムシ、ヨトウムシ、コナガ、アオムシ	
○ フェロモン剤利用技術	コナガ		
その他の 留意事項	2作目以降の施肥量は土壌診断により減量する。 化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

2.4 しゅんぎく

しゅんぎくは、軟弱野菜の主力作物のひとつとして、ほぼ県内全域で栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぐため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料施用により化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、マメハモグリバエ等は開口部や側面等の防虫ネットの被覆により飛来を抑制することにより、化学農薬使用回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1～2 t/10a (年間 3t) (牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 (露地) 10kg/10a 以下 (施設) 8 kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		
	対象病虫害等		
	○ 生物農薬利用技術	ヨトウムシ、アブラムシ類	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アブラムシ類、コナジラミ類	
	○ 熱利用土壌消毒技術(太陽熱利用)	マメハモグリバエ、雑草、菌核病	
	○ 光利用技術(光反射テープ)	アブラムシ類	
○ 被覆栽培技術(サイト等防虫ネット被覆、べたがけ栽培)	マメハモグリバエ、アブラムシ類		
○ フェロモン剤利用技術	ヨトウムシ		
その他の 留意事項	2作目以降の施肥量は土壌診断により減量する。 化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね 2 割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

2.5 ベビーリーフ（若獲り、主に摘み取りの施設軟弱野菜）

ベビーリーフは、上郡町、丹波市で主に栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぐため、土づくりは、たい肥等土づくりを徹底し、地力の維持増進を進めることが重要である。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は雨よけ栽培、防虫ネットを利用し、害虫の飛来を抑制するとともに、黄色（青色）粘着板によるアブラムシ類、アザミウマ類の発生予察および誘殺を図り、化学農薬使用回数を削減する。また、太陽熱利用による土壌消毒で萎凋病等の発生を抑える。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。		1～2t /10a(年間3t) (牛ふんたい肥の場合)
化学肥料 低減技術	○ 有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。		化学窒素成分量 7kg /10a 以下 (1作平均)
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 生物農薬利用技術（BT剤）	ヨトウムシ類、コナガ、アオムシ	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アブラムシ類	
	○ 熱利用土壌消毒技術	萎黄病、立枯病、株腐病、 マメハモグリバエ、キスジノミハムシ	
	○ 光利用技術 (黄色（青色）粘着板、光反射テープ)	アブラムシ類、コナガラミ類、アザミウマ類	
○ 被覆栽培技術 (雨よけ栽培、防虫ネット)	アブラムシ類、キスジノミハムシ、ヨトウムシ類、コナガ、アオムシ、マメハモグリバエ 雑草、萎凋病、疫病、菌核病		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

26 チンゲンサイ

チンゲンサイは、軟弱野菜の主力作物のひとつとして、ほぼ県内全域で栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぐため、土づくりは、たい肥等土づくりを徹底し、地力の維持増進を進めることが重要である。また、施肥は、有機質肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、ヨトウムシ類等は開口部や側面等の防虫ネットの被覆により飛来を抑制する。またフェロモン剤、BT剤を利用したコナガの発生抑制や太陽熱利用による土壌消毒により、化学農薬使用回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1~2t/10a (年間 3t) (牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 (露地) 20kg/10a 以下 (施設) 8 kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 生物農薬利用技術	コナガ、ヨトウムシ、ハスモンヨトウ	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	根こぶ病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、コジラミ類、アオシロコナガ、アザミマダラ類、ハモグリバエ類、ヨトウムシ類、ハイマダラノメイガ	
	○ 熱利用土壌消毒技術	根こぶ病、キスジノミハムシ	
	○ 光利用技術(光反射テープ)	アブラムシ類	
	○ 被覆栽培技術(サイト等防虫ネット被覆、べたがけ栽培)	ヨトウムシ、ハスモンヨトウ、アブラムシ類、キスジノミハムシ、マハモグリバエ、アオシロコナガ、ハイマダラノメイガ	
○ フェロモン剤利用技術	コナガ		
その他の 留意事項	2作目以降の施肥量は土壌診断により減量する。 化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

27 モロヘイヤ

モロヘイヤは、神戸市及び西播磨地域、但馬地域で主に栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図ることが重要である。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料施用により化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、ハダニ類等は周辺雑草を除去し、ハスモンヨトウはB T剤利用により発生を抑制することにより、化学農薬使用回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1~2 t/10a (年間 3t) (牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 (圃地) 36kg/10a 以下 (施設) 30kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 機械除草技術	雑草、ハダニ類	
	○ 生物農薬利用技術	ハスモンヨトウ、アブラムシ類	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	ハダニ類、うどんこ病、アブラムシ類	
	○ 光利用技術(粘着資材)	アザミマダラ類、コシジラミ類	
	○ 被覆栽培技術(サイト等防虫ネット被覆、べたがけ栽培、雨よけ栽培)	ハダニ類、マメコガネ、ハスモンヨトウ	
	○ フェロモン剤利用技術	ハスモンヨトウ	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	2作目以降の施肥量は土壌診断により減量する。 化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね 2 割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

2.8 エンサイ（クウシンサイ）

エンサイ（クウシンサイ）は、主に養父市でほうれんそうの連作に対する輪作作物として栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図ることが重要である。また、施肥は、有機質肥料や肥効調節型肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、防虫ネットやべたがけ栽培、光反射テープの利用によりアブラムシ等の侵入を防ぎ、ヨトウムシ類はフェロモン剤利用技術により化学農薬使用回数の削減に努める。

またマルチ栽培による抑草効果により除草剤の使用削減を図り、化学農薬使用回数を削減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物の利用 		1～2t /10a (年間 3t) (牛ふんたい肥の場合) 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 10kg /10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 生物農薬利用技術	ハスモンヨトウ、アブラムシ類	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	ハダニ類、アザミウマ類、アブラムシ類	
	○ 光利用技術(光反射テープ)	アブラムシ	
	○ 被覆栽培技術 (防虫ネット、べたがけ栽培、雨よけ栽培)	アブラムシ類、オオタバコガ、ハスモンヨトウ	
	○ フェロモン剤利用技術	ヨトウムシ類、オオタバコガ	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね 2 割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

2.9 その他漬け菜類（しろな、晩生菜、山東菜（ぺかなを含む））

その他漬け菜類は、こまつな等の主要な軟弱野菜の補完的な品目として県南部地域で栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぐため、土づくりは、たい肥等土づくりを徹底し、地力の維持増進を進めることが重要である。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料施用により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、アブラムシ類等は開口部や側面等の防虫ネットの被覆で、コナガはフェロモン剤、BT剤利用により発生を抑制することにより、化学農薬使用回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1～2 t/10a（年間3t） （牛ふんたい肥の場合） 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 （露地） 20kg/10a 以下 （施設） 8 kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 生物農薬利用技術	コナガ、アオムシ	
	○ 光利用技術（光反射テープ、粘着資材）	アブラムシ類、コナジラミ類	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類、アオムシ、コナガ、アザミウマ類、ハモグリバエ類、ヨトウムシ類、ハマダラカメムシ	
	○ 被覆栽培技術（サイト等防虫ネット被覆、べたがけ栽培）	アブラムシ類 ウイルス病、アオムシ、コナガ	
○ フェロモン剤利用技術	コナガ		
その他の留意事項	2作目以降の施肥量は土壌診断により減量する。 化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

30 ねぎ

ねぎは、軟弱野菜の主力作物のひとつとして、ほぼ県内全域で栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぐため、土づくりは、たい肥等土づくりを徹底し、地力の維持増進を進めることが重要である。また、施肥は、有機質肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、ネギハモグリバエ等は開口部や側面等の防虫ネットの被覆により飛来を抑制する。またフェロモン剤を利用してシロイチモジヨトウの発生抑制やマルチの利用により、化学農薬使用回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1～2 t/10a (年間 3t) (牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 葉ねぎ (露地) 20kg/10a 以下 (施設) 15kg/10a 以下 根深ねぎ (露地) 25kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	アザミウマ類、コジラミ類	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アザミウマ類、シイモンジヨトウ、アブラムシ類、ハダニ類、コジラミ類	
	○ 熱利用土壌消毒技術(太陽熱利用)	ネギアザミウマ	
	○ 光利用技術(光反射テープ、光反射マルチ、ラノーテープ、粘着資材)	ネギアザミウマ、アブラムシ類、コジラミ類	
	○ 被覆栽培技術(サイド等防虫ネット被覆)	ネギハモグリバエ、ネギアザミウマ、シイモンジヨトウ	
	○ フェロモン剤利用技術	シイモンジヨトウ	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	2作目以降の施肥量は土壌診断により減量する。 化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね 2 割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

3.1 アスパラガス

アスパラガスは、水田を利用した転作作物として、主に姫路市で栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぐため、土づくりは、たい肥等土づくりを徹底し、地力の維持増進を進めることが重要である。また、施肥は、有機質肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、ネギアザミウマについては光反射マルチ、周辺雑草の除去、ジュウシホシクビナガハムシについては紫外線カットフィルムの利用により飛来を抑制するとともに、マルチ栽培や雨除け栽培により茎枯れ病の発生を抑制し、化学農薬使用回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み 		1~2 t/10a (年間 3t) (牛ふんたい肥の場合) 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施肥技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 20kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 生物農薬利用技術	アザミウマ類、ハダニ類	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アザミウマ類、アブラムシ類、 ハダニ類、コナジラミ類	
	○ 光利用技術(光反射マルチ、紫外線カットフィルム)	ネギアザミウマ、ジュウシホシクビナガハムシ	
	○ 被覆栽培技術(雨除け栽培) ○ マルチ栽培技術	茎枯病 茎枯病、雑草	
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね 2 割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

3.2 メロン

メロンは、水田を利用し、直売用特産物としてほぼ県内全地域で栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図ることが重要である。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料の施用や局所施肥技術により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、つる割れ病等については抵抗性台木の利用やマルチ栽培、ウリハムシやアブラムシ類については光反射資材の利用や被覆栽培により、化学農薬使用回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1~2 t/10a (牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施肥技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 (露地) 8kg/10a 以下 (施設) 15 kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 生物農薬利用技術(天敵の利用、バンカー植物の栽培)	汁キイロアザミウマ ハダニ類	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	つる割病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	ハダニ類、ハダニ類、アザミウマ類、ハモグリハエ類、ウリメカ、うどんこ病、アブラムシ類、コジラミ類、モザイク病感染防止	
	○ 熱利用土壌消毒技術	つる割病	
	○ 光利用技術(光反射フィルムマルチ、光反射テープ、紫外線カットフィルム、粘着資材)	ウリハムシ、アブラムシ類、汁キイロアザミウマ、コジラミ類	
	○ 被覆栽培技術(寒冷紗の利用、防虫ネット被覆)	ウリハムシ、アブラムシ類	
○ マルチ栽培技術	つる割病、疫病、雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

3.3 すいか

すいかは、水田利用による直売用特産物として、また畑では市場等出荷用として、ほぼ県内全域で栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図ることが重要である。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料の施用や局所施肥技術により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、つる割病については抵抗性台木の利用、その他菌類病についてはマルチ栽培、ウリハムシやアブラムシ類については光反射資材の利用や被覆栽培を行い、化学農薬使用回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1～2 t/10a（牛ふんたい肥の場合） 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施肥技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 18kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 生物農薬利用技術	ハダニ類、アザミヤカ類	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術（ユカガオ、トウガンに接木する）	つる割病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	ハダニ類、アザミヤカ類、うどんこ病、アブラムシ類、コジラミ類、モザイク病感染防止	
	○ 光利用技術（光反射フィルムマルチ、光反射テープ）	ウリハムシ、アブラムシ類、ミメキイロアザミヤカ	
	○ 被覆栽培技術（寒冷紗の利用等）	ウリハムシ、アブラムシ類	
○ マルチ栽培技術	疫病、べと病、雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

3.4 カリフラワー

カリフラワーは、但馬地域で主に栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぎ高品質安定多収とするため、土づくりは、たい肥等土づくりを徹底し、地力の維持増進を進めることが重要である。また、施肥は、有機質肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、コナガ、アオムシ等については苗床の寒冷紗被覆、フェロモン剤、生物農薬を利用するとともに、機械除草による雑草抑制等により、化学農薬使用回数の削減に努める。また、光反射テープや太陽熱を利用した土壌消毒も活用する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1～2 t/10a (牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施肥技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 35kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 生物農薬利用技術	コナガ、アオムシ	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	黒腐病v	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	コナガ、うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、コジラミ類	
	○ 熱利用土壌消毒技術（太陽熱利用）	苗立枯病、根こぶ病	
	○ 被覆栽培技術（ネットトンネル、寒冷紗、不織布の利用等）	コナガ、アオムシ、アブラムシ類	
○ フェロモン剤利用技術	コナガ		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね 2 割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

3.5 ばれいしょ

ばれいしょは主に北播磨、淡路地域で栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぐため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図ることが重要である。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料の施用や局所施肥技術により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、アブラムシ類は光反射テープ等により飛来を抑制するとともに、マルチ栽培による抑草効果により、除草剤の使用削減を図り、化学農薬使用回数を削減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 		1~2 t/10a (牛ふんたい肥の場合) 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 15kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		対象病害虫等
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	軟腐病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アブラムシ類	
	○ 光利用技術(光反射テープ)	アブラムシ類	
○ マルチ栽培技術	ジャガイモ、雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

36 にんじん

にんじんは、主に西播磨地域で栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぎ、高品質安定多収とするため、土づくりは、たい肥等土づくりを徹底し、地力の維持増進を進めることが重要である。また、施肥は、有機質肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、生物農薬を利用するとともに、機械除草、マルチ栽培により雑草を抑制する等、化学農薬使用回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 		1~2 t/10a (年間 3t) (牛ふんたい肥の場合) 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料 (有機入り化成肥料を含む) 施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 15kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 機械除草技術	雑草、ネムシ類	
	○ 生物農薬利用技術	ハスモンヨトウ	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	黒葉枯病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	ハダカバエ類、うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類	
	○ 光利用技術 (光反射テープ)	アブラムシ類	
	○ 被覆栽培技術 (トンネル被覆)	ヨウムシ、ハスモンヨトウ	
	○ フェロモン剤利用技術 (フェロモントラップ)	ヨウムシ	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね 2 割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

37 スイートコーン

スイートコーンは東播磨、丹波地域で主に栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぎ、高品質安定多収とするため、土づくりは、たい肥等土づくりを徹底し、地力の維持増進を進めることが重要である。また、施肥は、有機質肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、イネヨトウは早期発見し、ふ化直後の群生幼虫が分散するまでに被害葉を除去する。また、除草を行いアワヨトウの発生を抑えるとともに、光反射テープを張りアブラムシ類の発生を抑え、化学農薬使用回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1~2 t/10a (牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 25kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 機械除草技術	アワヨトウ、雑草	
	○ 生物農薬利用技術(BT剤の利用)	アワノメイガ	
	○ 光利用技術(光反射テープ)	アブラムシ類	
	○ フェロモン剤利用技術	オオタバコガ	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

38 かぼちゃ

かぼちゃは、三木市、丹波地域で主に栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用や緑肥作物の作付けにより地力の維持増進を図ることが重要である。また、施肥は、有機質肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、疫病は3～4年の輪作を行い、排水を良くし、窒素の多施用を避けることにより発生を抑制し、タネバエは有機物の腐敗臭に成虫が誘引されやすいので施用を避ける等、化学農薬使用回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は播種2～3ヶ月前に全量すき込む。 		1～2 t/10a (牛ふんたい肥の場合) 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 18kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	ハスモンヨトリ	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、コジラミ類	
	○ 光利用技術(光反射テープ)	アブラムシ類	
	○ フェロモン剤利用技術	ハスモンヨトリ	
○ マルチ栽培技術	雑草、疫病(褐色腐敗病)		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

39 ブッキーニ

ブッキーニは、県内各地で栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図ることが重要である。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調整型肥料の施用を基本とし、局所施肥等を組み合わせた施肥効率の向上により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は発生状況を把握しながら適期に行うとともに、マルチ栽培による雑草抑制、光反射テープや生物農薬の利用等により、化学農薬使用回数を削減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等有機質資材の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物の利用 		1～2t /10a (牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調整型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施用を行う。 		化学窒素成分量 26kg /10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬等利用技術	ヨトウムシ、アブラムシ類	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類	
	○ 光利用技術 (光反射テープ等)	アサミウメ類、アブラムシ類	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	<p>化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。</p>		

40 オクラ

オクラは、阪神地域、東播磨地域で主に栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図ることが重要である。また、施肥は、有機質肥料の施用を基本とし、局所施肥や肥効調節型肥料を組み合わせた施肥効率の向上により、化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、マルチ栽培による雑草抑制、光反射テープや生物農薬、被覆栽培やフェロモン剤の利用等により、化学農薬使用回数を削減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わらすき込み 		1～2t/10a（牛ふんたい肥の場合） 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）施用とする。 ○ 局所施用技術による施用を行う。 ○ 肥効調節型肥料施用技術 		化学窒素成分量 42kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬等利用技術	うどんこ病、灰色かび病 アブラムシ類	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アザミウマ類 うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、コシジラミ類	
	○ 光利用技術 （光反射テープ） （光反射マルチ）	アブラムシ類	
	○ 被覆栽培技術	オオタバコガ、ハスモンヨトウ	
	○ フェロモン剤利用技術	オオタバコガ、ハスモンヨトウ	
○ マルチ栽培技術	雑草、葉すす病、灰色かび病		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

4.1 パセリ

パセリは、上郡町で主に栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図ることが重要である。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料施用により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、排水を良くし連作を避けることにより疫病、軟腐病の発生を抑える。ハスモンヨトウはふ化直後の群生幼虫の被害葉を除去することにより発生を抑制し、化学農薬使用回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1~2 t/10a (年間 3t) (牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 45kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 生物農薬利用技術	ハスモンヨトウ、キアゲハ	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	ヨウムシ、うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、コシジラミ類	
	○ 被覆栽培技術(雨除け栽培技術)	疫病、軟腐病	
○ フェロモン剤利用技術	ハスモンヨトウ		
その他の 留意事項	2作目以降の施肥量は土壌診断により減量する。 化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね 2 割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

4.2 ふき

ふきは、淡路市で主に栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図ることが重要である。また、施肥は、有機質肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、発病株を早目に除去し通風を良くするなどにより白絹病、灰色かび病の発生を抑制する。また、ネグサレセンチュウの抑制には連作を避け無病親株を用いる。アブラムシ類は育苗期に寒冷紗または不透明不織布で覆い発生を抑制することにより、化学農薬使用回数の削減に努める。また、光反射テープ、太陽熱を利用した土壌消毒やBT剤の導入を進める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。		2~4t/10a (牛ふんたい肥の場合)
化学肥料 低減技術	○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。		化学窒素成分量 60kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		対象病虫害等
	○ 機械除草技術	雑草、ナメクジ類	
	○ 生物農薬利用技術	アブラムシ類、ハスモンヨトウ	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	うどんこ病、アブラムシ類、 ハダニ類、コジラミ類	
	○ 熱利用土壌消毒技術	白絹病、ネグサレセンチュウ	
	○ 光利用技術(光反射テープ)	アブラムシ類	
	○ 被覆栽培技術(寒冷紗、サイド等防虫ネット被覆)	アブラムシ類、ハスモンヨトウ	
	○ フェロモン剤利用技術	ハスモンヨトウ	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	優良株の育成に努める。 2作目以降の施肥量は土壌診断により減量する。 化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

4.3 アマランサス

アマランサスは、養父市で栽培されている。種子が極めて小さいので、できるだけ細かい砕土のできるほ場を選ぶ。過湿にはやや弱いので排水の良いほ場が適する。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図ることが重要である。また、施肥は、有機質肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、ネキリムシ類は畑雑草の幼苗に好んで産卵する習性があるため、早期に雑草の除草を行い化学農薬使用回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1~2 t/10a (年間 3t) (牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 (露地) 40kg/10a 以下 (施設) 30kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 生物農薬利用技術(BT剤の利用)	アワノメイガ [®]	
	○ 光利用技術(光反射テープ)	アブラムシ類	
	○ 被覆栽培技術(サト [®] 等防虫ネット被覆、べたがけ栽培、雨よけ栽培)	アブラムシ類、オオタバコガ [®] 、ハスモンヨトリ	
	○ フェロモン剤利用技術	ハスモンヨトリ、オオタバコガ [®]	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	・ 2作目以降の施肥量は土壌診断により減量する。 ・ 化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

4.4 ごま

ごまは、県内各地で栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図ることが重要である。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調整型肥料の施用を基本とし、局所施肥等を組み合わせた施肥効率の向上により、化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生状況を把握しながら適期に行うとともに、機械除草やマルチ栽培による雑草抑制により、化学農薬使用回数を削減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等有機質資材の施用 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物の利用 		1～2t/10a(牛ふんたい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施用を行う。 		化学窒素成分量 13kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アブラムシ類	
	○ 光利用技術	アブラムシ類	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

4.5 うど

うどは、阪神地域、但馬地域で主に栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぎ、高品質安定多収とするため、土づくりは、たい肥等土づくりを徹底し、地力の維持増進を進めることが重要である。また、施肥は、有機質肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

また、機械除草、マルチ栽培による抑草効果により除草剤の使用削減を図り、化学農薬使用回数を削減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	○ 完熟牛ふんたい肥等有機質資材の施用		1～2t/10a（牛ふん たい肥の場合）
化学肥料 低減技術	○ 有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）施用とする。		化学窒素成分量 16kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	アブラムシ類	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アブラムシ類、コナジラミ類	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

4.6 にんにく

にんにくは、県内各地で栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図ることが重要である。また、施肥は、有機質肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除については発生状況を把握しながら適期に行うとともに、機械除草による雑草抑制により、化学農薬使用回数を削減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等有機質資材の施用 ○ 稲わら等のすき込み 		1～2t /10a (牛ふんたい肥の場合) 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施用を行う。 		化学窒素成分量 26kg /10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	アブラムシ類	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類	
	○ 光利用技術 (光反射テープ等)	アブラムシ類等	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

4.7 さやいんげん

さやいんげんは、阪神地域、丹波地域で主に栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぎ、高品質安定多収とするため、土づくりは、たい肥等土づくりを徹底し、地力の維持増進を進めることが重要である。また、施肥は、有機質肥料等の施用により、化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、光反射テープ等によりアブラムシ類の飛来を抑制するとともに、機械除草、マルチ栽培による抑草効果で除草剤の使用削減を図り、化学農薬使用回数を削減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等有機質資材の施用 ○ 稲わら等のすき込み 		1～2t/10a（牛ふん たい肥の場合） 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施用を行う。 		化学窒素成分量 16kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬等利用技術	ハスモンヨトリ	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用	さび病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類	
	○ 光利用技術 (光反射テープ等)	アブラムシ類	
	○ フェロモン剤利用技術	ハスモンヨトリ	
○ マルチ栽培技術	雑草、炭そ病		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

48 実えんどう

実えんどうは、丹波、淡路地域で主に栽培されている。連作障害による収量や品質の低下を防ぐため、マメ科作物が5年以上作付けされていない排水と日当たりが良いほ場を選定することが重要である。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料等の施用により、化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、マルチ栽培による除草剤の使用回数削減や機械除草により畦畔生息害虫の発生を抑制する。ハモグリバエ類は黄色粘着板を利用して捕殺することで化学農薬使用回数を削減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わらすき込み 		1～2t/10a(牛ふんたい肥の場合)
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 		化学窒素分量 14kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	畦畔生息害虫	
	○ 生物農薬利用技術	うどんこ病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	うどんこ病、アブラムシ類、ハモグリバエ類	
	○ 光利用技術 (黄色粘着板) (シルバーテープ)	ハモグリバエ類 アブラムシ類	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

49 ナタ豆

ナタ豆は、丹波地域で栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぎ、高品質安定多収とするため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正使用により地力の維持増進を進めることが重要である。また、施肥は、有機質肥料の施用を基本とし、局所施肥を組み合わせることで施肥効率の向上を図ることが必要である。

病虫害防除は、発生予察を活用しながら光反射テープ、光反射マルチ等の光利用技術を導入し、化学農薬の使用回数全体の節減を図っていく。

雑草対策は、機械による中耕培土やマルチ栽培を行い、除草剤の使用を少なくしていく。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み ○ 緑肥作物の利用 		1～2t /10a (牛ふん たい肥の場合) 全量還元 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 10kg /10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 機械除草技術	雑草、ハダニ類	
	○ 生物農薬利用技術	うどんこ病	
	○ 天然物質由来農薬利用 技術	うどんこ病、ハダニ類、ア ブラムシ類、	
	○ 光利用技術(光反射テープ、 光反射マルチ)	ウイルス病、アブラムシ類	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	<p>化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定する。</p> <p>肥よく地では、基肥窒素は無施用とする。追肥は、生育に応じて開花時期を中心に施用する。</p> <p>高うね栽培をして湿害を防ぐとともに、土壌病害の発生を防ぐ。</p> <p>機械除草技術、マルチ栽培技術によってほ場内のアブラムシ類、ハダニ類を防除するとともに、ほ場周辺のマメ科雑草を除去する。</p>		

50 さといも

さといもは、朝来市、丹波地域で主に栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぎ、高品質安定多収とするため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正量施用や緑肥作物の作付けにより地力の維持増進を進めることが重要である。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、アブラムシ類は光反射テープ等により飛来を抑制するとともに、機械除草、マルチ栽培による抑草効果により、除草剤の使用削減を図り、化学農薬使用回数を削減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 		1～2t /10a (牛ふんたい肥の場合) 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料 (有機入り化成肥料を含む) 施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 		化学窒素成分量 15kg /10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	ハダニ類	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	ハダニ類	
	○ 光利用技術 (光反射テープ)	アブラムシ類	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

51 かんしょ

かんしょは、県内各地で栽培されている。連作による収量や品質の低下を防ぎ、高品質安定多収とするため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正量施用や緑肥作物の作付けにより地力の維持増進を進めることが重要である。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、抵抗性品種を選ぶことで黒斑病・ネコブセンチュウを、連作を避けることでハスモンヨトウを、未熟有機物の施用を避けることでコガネムシ類を防ぐ。

また、雑草対策は、マルチ栽培による抑草効果により、除草剤の使用削減を図り、化学農薬使用回数を削減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 		1～2t /10a (牛ふんたい肥の場合) 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料 (有機入り化成肥料を含む) 施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 		化学窒素成分量 4kg /10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	雑草対象	
	○ 生物農薬利用技術	ハダニ類	
	○ 対抗植物利用技術	ネコブセンチュウ	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用	ネコブセンチュウ	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	ハダニ類	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

52 ジネンジョ

ジネンジョは、主に宍粟市波賀町、佐用郡佐用町で栽培されている。耕地の土質条件はあまり問わないが、日照時間が長く、排水のよい、かん水のできる場所が望ましい。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正量施用や緑肥作物の作付けにより地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料の施用により化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、光反射テープ等によりアブラムシ類の飛来を抑制する。雑草対策は、マルチ栽培による抑草効果により、除草剤の使用削減を図り、化学農薬使用回数を削減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 		1～2t /10a (牛ふんたい肥の場合) 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料 (有機入り化成肥料を含む) 施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 		化学窒素分量 30kg /10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 機械除草技術	雑草対象	
	○ 生物農薬利用技術	ハダニ類	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	ハダニ類	
	○ 光利用技術 (光反射テープ)	アブラムシ類	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

5.3 ごぼう

ごぼうは、主に西脇市、多可町で栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正使用や緑肥作物の作付けにより地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料を施用し局所施肥を行うことにより化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、未熟有機物の施用・連用を避けることで黒あざ病を、連作・窒素過多栽培を避けることで黒斑細菌病を防ぐ。また、光反射テープ等によりアブラムシ類の飛来を抑制する。除草対策は、機械除草、マルチ栽培による抑草効果により、除草剤の使用削減を図り、化学農薬使用回数を削減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 		1～2t /10a（牛ふんたい肥の場合） 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）施用とする。 ○ 局所施用技術による施肥を行う。 		化学窒素成分量 20kg /10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	うどんこ病、ハダニ類	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	うどんこ病、アブラムシ類、コシジラミ類	
	○ 光利用技術（光反射テープ）	アブラムシ類	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

5.4 れんこん

れんこんは、中播磨・阪神等で主に栽培されている。作土が深い細粒の粘質土壌であって、栽培期間中用水が確保でき水田状態を維持できるほ場で栽培する。土づくりは、たい肥の施用により地力の維持増進に努める。また、施肥は、有機質肥料や肥効調整型肥料等の施用により、化学肥料の低減並びに高品質化を図る。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、機械除草による雑草抑制、光反射テープや生物農薬の利用等により、化学農薬使用回数を削減する。褐斑病等の病害防除やウキクサ類等の発生による生育停滞を防ぐため、適期防除により防除回数の削減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	○ 土壌診断や過去の生育状況を考慮し、完熟たい肥等を適正に施用する。		1～2 t /10a
化学肥料 低減技術	○ 局所施肥(側条施肥) ○ 肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○ 有機質肥料を施用する。		化学窒素分量 40.6kg /10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		対象病虫害等
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	ハスモンヨトウ	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	うどんこ病、アブラムシ類	
	○ 光利用(光反射テープ、粘着資材)	アブラムシ類	
○ フェロモン剤利用	ハスモンヨトウ		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

5.5 とうがらし類

とうがらし類は、県内のほぼ全域で栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料の施用や局所施肥技術の活用により、化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、マルチ栽培による雑草抑制、光反射テープや生物農薬の利用等により、化学農薬使用回数を削減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わらすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1~2t/10a (牛ふんたい肥の場合) 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料 (有機入り化成肥料を含む) 施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施用を行う。 		化学窒素成分量 40kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 生物農薬等利用技術	オオタバコガ、ハスモンヨトウ	
	○ 抵抗性品種・台木利用	疫病、青枯病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、コシジラミ類、モザイク病感染防止	
	○ 光利用技術(光反射テープ、	アブラムシ類	
	○ 被覆栽培技術(防虫ネット等)	チョウ目害虫等	
	○ フェロモン剤利用	オオタバコガ、ハスモンヨトウ	
○ マルチ栽培技術	ウイルス病、疫病、雑草、灰色かび病		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

56 にがうり

にがうりは、ほぼ県内全域で栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図ることが重要である。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料の施用を基本とし、局所施肥等を組み合わせた施肥効率の向上により、化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、マルチ栽培による雑草抑制、光反射テープや生物農薬の利用等により、化学農薬使用回数を削減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 稲わらすき込み ○ 緑肥作物利用技術 		1～3t/10a (牛ふんたい肥の場合) 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術による施用を行う。 		化学窒素成分量 30kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 生物農薬等利用技術	カメノガ	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	つる割病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、コジラミ類	
	○ 熱利用土壌消毒	つる割病	
	○ 光利用技術(光反射テープ、光反射マルチ)	アブラムシ類	
	○ 被覆栽培技術(サイド等防虫ネット被覆技術)	ミナキイロアザミ、アブラムシ類、コジラミ類	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

5.7 アイスプラント

アイスプラントは、三木市等で栽培されている。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図ることが重要である。また、施肥は、有機質肥料施用を基本とし化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、マルチ栽培による雑草抑制、生物農薬の利用等により、化学農薬使用回数を削減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。		1～3t/10a (牛ふんたい肥の場合)
化学肥料 低減技術	○ 有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）施用とする。		化学窒素成分量 14kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 被覆栽培技術（防虫ネット等）	チョウ目害虫	
	○ マルチ栽培技術	雑草	
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

58 温州みかん

温州みかんの主な栽培地域は淡路全域と赤穂市である。産地の土壌条件は、花崗岩質土壌、和泉砂岩質土壌、第三紀土壌に大別されるが比較的地力の乏しい土壌である。さらに、急傾斜地での栽培が多いため、肥料が流亡しやすく肥料効率が低い。このため、土づくりは、草生栽培と良質なたい肥の施用による土壌流亡防止と保肥力の増強を図ることが重要である。

病害虫防除は、発生予察情報を基本に、適期適正防除の徹底により化学農薬使用回数の削減を図る一方、カミキリ防除ネットによるカミキリムシ対策をはじめ天敵利用を積極的に図る。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 		1～2 t /10a（牛ふんたい肥の場合）
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 基肥は有機質肥料（有機入り化成肥料含む）を中心に施用する。 		化学窒素成分量 16kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	ゴマダラカミキリムシ、ヤノネカイガラムシ、セリヤカイガラムシ、ルビローカイガラムシ、灰色かび病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	かいよう病	
	○ 光利用技術 （黄色等灯の利用） （光反射マルチの利用）	吸蛾類 アザミウマ類	
	○ 被覆栽培技術 （防風・防除ネットなど）	かいよう病、ゴマダラカミキリムシ	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

5.9 中晩生柑橘類（不知火、いよかん、はっさく等）

中晩生柑橘類主な栽培地域は淡路全域である。産地の土壌条件は、花崗岩質土壌、和泉砂岩質土壌、第三紀土壌に大別されるが比較的地力の乏しい土壌である。さらに、急傾斜地での栽培が多いため、肥料が流亡しやすく肥料効率が低い。このため、土づくりは、草生栽培と良質なたい肥の施用による土壌流亡防止と保肥力の増強を図ることが重要である。

また、病虫害防除は、発生予察情報を基本に、適期適正防除の徹底により化学農薬使用回数削減を図る一方、カミキリ防除ネットによるカミキリムシ対策をはじめ天敵利用を積極的に図る。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 		1~2 t/10a（牛ふんたい肥の場合）
化学肥料 低減技術	○ 基肥は有機質肥料（有機入り化成肥料含む）を中心に施用する。		化学窒素成分量 33kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	ゴマダラカミキリムシ、ヤノネカイガラムシ、イセリヤカイガラムシ、ルビローウカイガラムシ、灰色かび病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	カイガラムシ類、ミカンキジラミ、ハダニ類、ナミアゲハ、アザミウマ類、ミカンハモグリガ、サビダニ類	
	○ 光利用技術 (黄色等灯の利用) (光反射マルチの利用)	吸蛾類 アザミウマ類	
	○ 被覆栽培技術 (防風・防除ネットなど)	かいよう病 ゴマダラカミキリムシ	
	○ マルチ栽培技術	雑草	
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

60 なし

なしは、県北地域（但馬・丹波地域）で二十世紀なしが、県南地域（神戸）で赤なしが栽培されている。両地域とも、高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正施用により地力の維持増進を図ることが重要である。

県北地域の二十世紀なしは、栽培の歴史も古く栽培技術も高いが、急傾斜地での栽培のため、作業効率の悪さと肥料の流亡、他の果樹に比べて防除回数が多いことから、病害虫対策は、耐病性品種の導入と合成性フェロモンによる防除回数の削減を図る。また、除草対策は、敷草等々のマルチにより雑草の発生を抑制し、機械除草により除草剤の使用回数を削減する。

県南地域の赤なしは省力栽培を目指し、病害虫対策は、黄色蛍光灯による夜蛾対策と一部のカメムシ対策とともに、耐病性品種の導入と合成性フェロモンの利用により、防除回数の削減を図る。また、除草対策は、緩傾斜で機械化が容易なため、機械除草により除草剤の使用回数を削減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 		1～2t/10a（牛ふんたい肥の場合）
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 基肥は有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）を中心に施用する。 		化学窒素成分量 青なし 15kg/10a以下 赤なし 21kg/10a以下
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	雑草、ナシグンバイ	
	○ 生物農薬利用技術	カメムシ類、ハマキムシ類	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	黒斑病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	サビダニ、ハダニ類、カイガラムシ類、ニセナシバダニ	
	○ 光利用技術（黄色灯の利用）	吸蛾類、チャバネオカメムシ類、シクイムシ類	
	○ 被覆栽培技術（園全体にネットをかける） （袋掛け栽培）	カメムシ類、鳥害 黒斑病、黒星病、赤星病、カメムシ類、シクイムシ類、吸蛾類、カイガラムシ類	
	○ フェロモン剤利用技術	ハマキムシ類、ナシヒメシクイ等	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

61 くり

くりは、「丹波栗」「北摂栗」で代表されるように伝統ある品目で、県内全域で栽培されている。急傾斜地での栽培が多く、一部水田での栽培も見られるが、ほとんどが山成り植栽もしくは造成畑への植栽である。深根性のため地味の深い肥沃地での栽培を進める。多収穫くり園とするため、土づくりは、低樹高栽培を前提に、良質たい肥の施用等により、地力の維持増進を図る。

病害虫防除は、クリタマバチの防除については、天敵の利用が有効であることから積極的な利用を進める。越冬病害虫の駆除（クスサン、クリオオアブラムシの卵等）及び、いがや落葉の処理等の耕種的防除により、化学農薬使用回数を減らすほか、生育期間中の適期適正防除により防除作業の効率化を図る。

除草対策は、敷草等のマルチにより草の発生を抑制するとともに、機械除草により除草剤使用を削減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 		1～2t/10a(牛ふんたい肥の場合)
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 基肥は有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)を中心に施用する。 傾斜地の場合は局所施肥を取り入れる。 		化学窒素成分量 16kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術(天敵利用)	クリタマバチ	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	クリタマバチ	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	カイガラムシ類	
	○ マルチ栽培技術	雑草	
その他の 留意事項	<p>収穫後の果実処理は、温湯処理が望ましい。</p> <p>化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。</p>		

6.2 いちじく

いちじくは、都市近郊の立地を生かした樹種として、県南地域及び淡路地域で栽培されている。水田転換での栽培が主で、畝立てによる一文字整枝栽培がほとんどである。かん水方法は畝間かん水が多く、肥料のは場外への流亡が考えられる。このため、土づくりは、良質なたい肥等の施用により保肥力の増強を図ることが重要である。また、施肥は、チューブかん水等のかん水方法の改善により肥効を高める。

また、年によってはアザミウマや果実腐敗により年間の作柄が左右されることから、病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、結果枝本数の制限やうね間の拡大による通風条件の改善により病害の発生を抑える等耕種的防除を徹底する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 		1～2t/10a(牛ふんたい肥の場合)
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 基肥は有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）を主体に施用する。 かん水チューブ等によるかん水方法の改善により肥効の安定を図る。 		化学窒素成分量 15kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	カミキリムシ類、ネブセンチュウ	
	○ 光利用技術（光反射フィルムマルチ、光反射テープ）	アザミウマ類	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	株枯病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	ハダニ類、アザミウマ類	
	○ 被覆栽培技術（雨よけ技術） ○ マルチ栽培技術	疫病等 疫病、雑草	
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

6.3 ぶどう

ぶどうは、県内全域で栽培されている。平地または緩傾斜地での栽培がほとんどである。一部水田での栽培はあるが、ほとんどは造成畑で、やや粘質な土壌から砂質土壌まで産地の土壌条件は多様である。年間施肥量も少なく、特に大粒系品種ではその傾向が強いことから、樹勢の維持と、計画的な土壌改良、土づくりとして、良質なたい肥等の施用により肥効を高める必要がある。

一部被覆による雨よけ栽培のため防除回数は少ないが、年によりべと病、灰色かび病、アザミヤが大発生し、後追い防除による防除回数の増加に陥ることがあることから、病害虫防除は、発生予察を活用するとともに、落葉、腐敗果、巻きづるなどの掃除はもちろんのこと、園周辺の草刈りの徹底、粗皮けずりなどの耕種的防除を徹底する。また、表土管理は、草生マルチ栽培または敷草等による管理を中心にし、これにより除草剤の散布を極力抑える。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<input type="radio"/> 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 <input type="radio"/> 緑肥作物利用技術		1～2t/10a（牛ふん たい肥の場合）
化学肥料 低減技術	<input type="radio"/> 基肥は有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）を主体 に施用する。		化学窒素成分量 13kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	<input type="radio"/> 機械除草技術	雑草、コウモリカ、ハダニ類	
	<input type="radio"/> 生物農薬利用技術	灰色かび病、ハダニ類	
	<input type="radio"/> 抵抗性品種栽培・台木利用技術	ブドウネアブラムシ	
	<input type="radio"/> 天然物質由来農薬利用技術	ハダニ類	
	<input type="radio"/> 被覆栽培技術 （一部被覆栽培、袋掛け栽培）	黒痘病、晩腐病、べと病 他	
その他の 留意事項	<input type="radio"/> マルチ栽培技術		施肥量は、大粒系品種の場合は化学窒素成分6～8kgとする。 化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。

6.4 びわ

びわは、淡路地域の特産果樹として栽培の歴史も古く、栽培技術も平準化している。特に、南あわじ市灘、淡路市野島に産地が限られ海岸線に近い急傾斜地での栽培となっている。今後は、低樹高栽培への移行により栽培管理が行き届きやすいようにする。土づくりは、肥料の流亡を避け肥効が安定するよう、良質たい肥の施用を積極的に進める。また、施肥は、分施肥とするが有機質肥料を主体とし、追肥としての化学肥料はできる限り抑制する。

病虫害被害は、品質向上と病虫害防除を兼ねて袋掛け栽培を行なう。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 		1~2t/10a(牛ふんたい肥の場合)
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 基肥は有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)を主体に施用する。 		化学窒素分量 21kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	ハダニ類	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	カイガラムシ類、ミカンハダニ	
	○ 被覆栽培技術 (袋掛け栽培)	病虫害全般	
	○ フェロモン剤利用技術	ナシヒメジクイ	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

65 もも

ももは、古くから川西市で栽培されていたが、近年水田転換田を利用した直売やオーナー制を目的とした栽培が県内各地で広まっている。土づくりは、たい肥を表面施用し深耕を行う。また、施肥は、樹勢が旺盛なため、年間の施肥量は少なめとし、基肥には有機質肥料を主体とした施肥を行う。

病害虫防除は、防風ネットで園全体を覆い、穿孔細菌病の発生を抑制する。また、黄色灯や防除ネットにより吸蛾類やカメムシ類の対策を行い、化学農薬の使用回数を削減する。また、雑草対策は、敷草等のマルチにより雑草の発生を抑制し、機械除草により除草剤の使用回数を減らす。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 		1～2t/10a (牛ふんたい肥の場合)
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 基肥は有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)を主体に施用する。 		化学窒素分量 10kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	ハダニ類、モモシクイガ	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	サビダニ、アブラムシ類、カイガラムシ類、ハダニ類、モモサビダニ、ミカンキイロアザミウマ、リンゴコカクモンハマキ、モモハダニガ、シクイムシ類	
	○ 光利用技術(黄色等灯の利用)	吸蛾類	
	○ 被覆栽培技術 (園全体をネットで覆う、袋掛け栽培、防虫ネット被覆)	吸蛾類、カメムシ類、穿孔細菌病黒星病、シクイムシ類、モモチョウキゾウムシ、鳥害	
○ フェロモン剤利用技術	ハマキムシ類、モモシクイガ等		
○ マルチ栽培技術 (草生栽培を含む)	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

66 かき

かきは、古くから県内全域栽培されているが、多くは直売やオーナー制を目的とした栽培である。土づくりは、たい肥を施用し深耕を行い、深くまで膨軟で通気性の高い土壌条件を維持するよう努める。また、施肥は、急激な肥効が起こらない有機質肥料を主体として施肥を行うとともに、追肥は樹勢の弱っている場合のみの施用とする。

病害虫防除は、ネットで園全体を覆い吸蛾類の飛来を抑えるとともに、生物農薬の利用によるイラガ類の発生を抑制し、化学農薬の使用回数を削減する。また、雑草対策は、機械除草を行うことにより除草剤の使用回数を減らす。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安	
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 		1～2t/10a (牛ふんたい肥の場合)	
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 基肥は有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)を主体に施用する。 ○ 局所施用技術(穴肥) 		化学窒素分量 16kg/10a以下	
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		対象病害虫等	
	○ 機械除草技術			雑草
	○ 生物農薬利用技術			
	○ 天然物質由来農薬利用技術			カイガラムシ、サビダニ、フジコカイガラムシ、カイガラムシ類
	○ 光利用技術(黄色等灯の利用)			チャバ初オオムシ
	○ 被覆栽培技術(園全体をネットで覆う)			吸蛾類、カメムシ類、鳥害
	○ フェロモン剤利用技術			カキハタムシガ
	○ マルチ栽培		雑草	
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。			

67 うめ

うめは、県内全域で栽培されており、特に、たつの市（旧御津町）において大規模に栽培されている。土づくりは、たい肥を施用し深耕を行う。また、施肥は、急激な肥効が起きない有機質肥料を主体に用いる。

病虫害防除は、冬季落葉時における対策を徹底するとともに、化学合成農薬の使用回数を減らす。雑草対策は、機械除草を行うことにより、除草剤の使用回数を減らし、

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 ○ 緑肥作物利用技術 		1～2t/10a(牛ふんたい肥の場合)
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 基肥は有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）を主体に施用する。 		化学窒素分量 23kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 機械除草技術	雑草、ケムシ類	
	○ 生物農薬利用技術	ケムシ類、コスカシハ	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アブラムシ類、カイガラムシ類、ハダニ類	
	○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術	コスカシハ 雑草	
その他の 留意事項	<p>化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。</p> <p>園地の日照、通風条件を整える必要がある。</p>		

68 ブルーベリー

ブルーベリーは、丹波地域で主に栽培されている。地力の維持増進及び土壌pHの改善を図るため、土づくりは、ピートモス等の有機物を施用する。また、施肥は、有機質肥料及び肥効調節型肥料の施用を基本とし、化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除については、発生予察を活用するとともに、マルチ栽培による雑草抑制、生物農薬の利用等により、化学農薬使用回数を削減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ ピートモス等有機質資材の施用 ○ 緑肥作物利用技術 		57～80% / 1本 (ピートモスの場合)
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 		化学窒素成分量 10kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬等利用技術	ハマキムシ類	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	カイガラムシ類	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

69 茶

茶は、県内各地で栽培されている。茶園土壌の特性によって肥料成分のほ場外への流亡も問題となっている。このため、土づくりは、たい肥等土壌改良材を投入することにより土壌の保肥力を高め、物理性を改善する。また、施肥は、肥効調節型肥料や有機質肥料を主体とし、マルチのうね間敷設を組み合わせることにより、肥料成分の流亡を抑え、施肥量の削減に努める。

病害虫防除は発生予察による効率的な防除を行うとともに、黄色灯等やフェロモン剤を利用したハマキガ類の発生抑制や生物農薬の利用により、化学農薬の使用回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。		2～3t/10a (牛ふん たい肥の場合)
化学肥料 低減技術	○ 有機質肥料（有機入り化成肥料を含む）を利用する。 ○ 肥効調節型肥料を利用する。		化学窒素分量 55kg/10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	チャノホリガ、チャハマキ、チャノコカモン ハマキ、ヨモギエダシヤク、クワシロカ イガラシ、カンザワハダニ	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用 技術	クワシロカイガラシ、炭疽病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	シヤクトリムシ類、チャノホリガ、ク ワシロカイガラシ、チャトゲコソシラ ミ、カンザワハダニ、カイガラシ 類、チャノカサビダニ、チャノ ホリガ、チャノホリダニ、ヨモギエダ シヤク、チャノキイロアザミウマ、チャ ノコカモンハマキ、チャハマキ	
	○ 光利用技術（黄色灯の利 用）	チャノホリガ、チャハマキ、チャノコカモン ハマキ	
○ フェロモン剤利用技術	チャノコカモンハマキ、チャハマキ		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素分量を上 記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考 慮し、施肥量を決定すること。		

70 きく

きく生産は、露地栽培を中心に神戸、北播磨、丹波、淡路地域を中心にほぼ全域に広がっている。また、三木、淡路地域では施設による周年栽培もみられる。高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等の適正使用により地力の維持増進をはかる。また、施肥は、有機質肥料の施用により、化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、発生予察を活用するとともに、光防除技術やネットハウスなど耕種的防除技術の利用により化学農薬使用回数の削減や、太陽熱を利用した土壌消毒、水稲等の輪作体系の確立を進める。

区分	・ 持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み 		1~2 t/10a 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ マルチ栽培技術 		化学窒素成分 30 kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		対象病虫害等
	○ 機械除草技術		雑草
	○ 生物農薬利用技術		オオタバコガ、ハスモンヨトウ
	○ 天然物質由来農薬利用技術		ハダニ類、アザミウマ類、ハモグリバエ類、オオタバコガ、アブラムシ類
	○ 熱利用土壌消毒技術		土壌病虫害、雑草
	○ 光利用技術（黄色等灯、反射フィルムマルチ、反射テープ、粘着資材、紫外光照射等）		オオタバコガ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、アブラムシ類、アザミウマ類、コジラミ類、白さび病
	○ 被覆栽培技術（ネットハウス、防虫ネット被覆等）		オオタバコガ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、アブラムシ類、アザミウマ類、マハモグリバエ、カマシジキ類等
	○ フェロモン剤利用技術		オオタバコガ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ
○ マルチ栽培技術		雑草	
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素分量を上記(使用の目安)の概ね2割り増しを上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

7.1 カーネーションおよびバラ

カーネーションおよびバラ生産は、神戸、東播磨、淡路地域等で行われ、すべてが施設栽培である。このため、土づくりは、牛ふんたい肥や有機物等の適正使用により地力の維持増進をはかる。また、施肥は、養液土耕栽培による局所施肥や有機質肥料の施用により、化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、光防除技術や施設の開口部等の防虫ネット被覆など、耕種的防除技術の利用や、蒸気や熱水を利用した土壌消毒の導入により、化学農薬使用回数の削減を図る。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	○ 完熟牛ふんたい肥等有機質資材の施用		1～2 t/10a ピートモス 1t/10a
化学肥料 低減技術	○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術(養液土耕栽培技術含む)		化学窒素成分 カーネーション 70 kg/10a 以下 バラ 56 kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 生物農薬利用技術	オオタバコガ、ハスモンヨトウ	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	立枯病、萎凋病、根頭がん腫病(バラ)	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	うどんこ病、ハダニ類、ハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類、カイガラムシ類若齢幼虫	
	○ 熱利用土壌消毒技術	土壌病害虫、雑草	
	○ 光利用技術 (黄色等灯、粘着資材、光反射フィルムマルチ、紫外光照射)	オオタバコガ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、アブラムシ類、コシジラミ類、ハダニ類、うどんこ病	
	○ 被覆栽培技術 (開口部や側面への防虫ネット被覆)	オオタバコガ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、アブラムシ類、アザミウマ類等	
	○ フェロモン剤利用技術	オオタバコガ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素分量を上記(使用の目安)の概ね2割増しを上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

7.2 その他露地切り花

露地切り花生産は、神戸市北区を中心としたシンテッポウユリや、淡路地域のキンセンカやハナナなどがある。シンテッポウユリは連作ができないことから水田との輪作が行われ、キンセンカ、ハナナは水稻裏作として栽培される場合が多い。しかし、牛ふんたい肥等有機物の施用が少なく生産力が低下している地域も現れている。そこで、高品質安定多収のため、土づくりは、牛ふんたい肥等有機質資材の適正使用により地力の維持増進をはかる。また、施肥は、有機質肥料の施用により、化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、フェロモン剤利用など耕種的防除技術の活用により化学農薬使用回数の削減や、太陽熱を利用した土壌消毒、水稻等の輪作体系の確立を進める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み 		1～2 t /10a 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 		化学窒素成分 シンテッポウユリ 40 kg/10a 以下 キンセンカ 24 kg/10a 以下 ハナナ 14.4 kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	オオタバコガ、ハスモンヨトリ	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アザミユマ類、うどんこ病、ハダニ類、アブラムシ類	
	○ 熱利用土壌消毒技術	土壌病虫害、雑草	
	○ 光利用技術(反射フィルムマルチ、反射テープ等)	アブラムシ類、アザミユマ類	
	○ フェロモン剤利用技術	オオタバコガ、ハスモンヨトリ、シロイロシヨトリ	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素分量を上記(使用の目安)の概ね2割り増しを上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

7.3 その他施設切り花

施設切り花は、ストック、チューリップ、トルコキキョウ、スイートピーなど多種類の花きが神戸、播磨、丹波、淡路地域等において施設栽培で生産されている。土づくりは、長年の連作による土壌の化学性、物理性、生物性の悪化による生産力の低下を防ぎ、高品質安定多収を確保するため、牛ふんたい肥や有機物等の適正使用により地力の維持増進をはかる。また、施肥は、肥効調節型肥料や有機質肥料の施用により、化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、光防除技術や施設の開口部等の防虫ネット被覆など、耕種的防除技術の利用により、化学農薬使用回数の削減や、蒸気や熱水を利用した土壌消毒の導入を進める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	○ 完熟牛ふんたい肥等有機質資材の施用		1～2 t/10a ピートモス 1t/10a
化学肥料 低減技術	○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ 局所施用技術(養液土耕栽培技術含む)		化学窒素成分) ストック 30 kg/10a 以下 チューリップ 15 kg/10a 以下 トルコキキョウ 20 kg/10a 以下 スイートピー 30 kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		対象病虫害等
	○ 生物農薬利用技術	オオタバコガ、ハスモンヨトウ	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アザミウマ類、うどんこ病、ハダニ類、アブラムシ類	
	○ 熱利用土壌消毒技術	土壌病虫害、雑草	
	○ 光利用技術(黄色等灯、反射フィルムマルチ、反射テープ、粘着資材)	オオタバコガ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、アブラムシ類、アザミウマ類、コシジラミ類	
	○ 被覆栽培技術(開口部や側面への防虫ネット被覆)	オオタバコガ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、アブラムシ類、アザミウマ類、マメハゲリハエ等	
	○ フェロモン剤利用技術	オオタバコガ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素分量を上記(使用の目安)の概ね2割り増しを上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

7.4 切り枝花木

切り枝花木生産は、神戸阪神、西播磨地域の山間部の斜面を利用したヒバ、マキ等丹波地域の若松、ヤブサンザシ、淡路地域の千両など多品目に及ぶ。花木は一度植え付けると数年から数十年間植え付けた状態になるので、初期の土づくりが重要であり、高品質安定多収のため、牛ふんたい肥等有機質資材の適正使用により地力の維持増進をはかる。また、施肥は、有機質肥料の施用により、化学肥料の施用量を削減する。

病虫害防除は、フェロモン剤利用など耕種的防除技術の活用により化学農薬使用回数の削減をすすめる。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥の施用を基本とする。 ○ 稲わら等のすき込み 		1～2 t/10a 全量還元
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。 ○ マルチ栽培 		化学窒素成分 若松 26 kg/10a 以下 ヤブサンザシ 13 kg/10a 以下 千両 16.5 kg/10a 以下 オウゴンヒバ 20 kg/10a 以下 マキ 19 kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		対象病虫害等
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	ケムシ類	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	ケムシ類	
	○ 熱利用土壌消毒技術(太陽熱消毒)	土壌病虫害、雑草	
	○ 光利用技術(反射フィルムマルチ、反射テープ等)	アブラムシ類	
○ フェロモン剤利用技術	オオタバコガ、ハスモンヨトウ、シロイモシヨトウ		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素分量を上記(使用の目安)の概ね2割増しを上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

7.5 鉢花、花壇用苗物

鉢花・花壇用苗物生産は、ほぼ県内全域で生産され、ハボタン、パンジーなど多品目にわたって栽培されている。用土は真砂土やピートモス等中心に配合されているが、適正な配合割合を進める必要がある。また、施肥は、肥効調節型肥料や有機質肥料の施用により、化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除は、寒冷紗や光反射テープ利用など耕種的防除技術の活用により化学農薬使用回数の削減をすすめる。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	○ たい肥等有機物資材の施用（ピートモス等の配合）		用土の50%～60%
化学肥料 低減技術	○ 有機質肥料(有機入り化成肥料を含む)施用とする。 ○ 肥効調節型肥料施用とする。		化学窒素成分 (リットル当り mg) アリッサム 100～200 インパチエンス 25～50 ガザニア 100～200 キンギョソウ 100～200 クリサンセム 200 ケイトウ 100～200 コリウス 200 サルビア 200 ジニア 200 シロタエギク 100～200 デージー 25～50 ナデシコ 200 パンジー 100～200 ビソカ 100～200 葉ボタン 200 ハーベナ 100～200 プリムラ類 100～200 ベチニア 100～200 ペゴニア・センパ 25～50 ポーチユカ 25～50 マリゴールド 200 以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		対象病害虫等
	○ 機械除草技術	雑草、アブラムシ類	
	○ 生物農薬利用技術	オタバコガ、ハスモンヨトウ	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	アザミウマ類、うどんこ病、ハダニ類、アブラムシ類	
	○ 熱利用土壌消毒技術	土壌病害虫、雑草	
	○ 光利用技術（黄色灯等、粘着資材、光反射テープ）	アブラムシ類、コシジラミ類、ハスモンヨトウ	
	○ 被覆栽培技術（開口部に防虫ネットを張る）	アブラムシ類、カメシラミ類、ハスモンヨトウ、シロイモシヨトウ、オタバコガ	
	○ フェロモン剤利用技術	オタバコガ、ハスモンヨトウ、シロイモシヨトウ、シロイモシヨトウ	
○ マルチ栽培	雑草		
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記(使用の目安)の概ね2割増しを上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

7.6 飼料用イネ

飼料用イネ（WCS等）は、水田を利用した自給飼料の生産を拡大するため県内全域で栽培されている。土づくりは、牛ふんたい肥、稲わら、緑肥作物等のすき込み等により地力の維持増進を図る。また、施肥は、有機質肥料の施用を基本とし、局所施肥等を組み合わせた施肥効率の向上により、化学肥料の施用量を削減する。

病害虫防除については、発生予察を活用するとともに、温湯種子消毒技術や生物農薬の利用等により、化学農薬使用回数を削減する。除草対策は、機械除草技術等の活用により雑草の発生抑制を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟牛ふんたい肥等の施用を基本とする。 連用年数により施用量を加減する。 ○ 緑肥作物の利用 		1～2 t /10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 肥効調節型肥料を施用する。 ○ 局所施肥技術による施肥を行う。 ○ 有機質肥料（有機入り化成肥料含む）を使用する。 		化学窒素成分量 12.6kg /10a以下
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	○ 温湯種子消毒技術	ばか苗病、ごま葉枯病、いもち病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、イネシガレセンチュウ	
	○ 機械除草技術	雑草、カラムシ類	
	○ 除草用動物利用技術（アイガモ等）	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	ばか苗病、ごま葉枯病、いもち病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病	
	○ 天然物質由来農薬利用技術	褐条病、苗立枯細菌病、もみ枯細菌病、コブノメイガ、ニカメイチュウ、フタホシコヤガ、イトトヨイムシ	
その他の 留意事項	化学肥料低減技術として有機質肥料を施用する場合は、窒素成分量を上記の「使用の目安」の概ね2割増を上限とするが、土壌診断や肥料原料を考慮し、施肥量を決定すること。		

第2 持続性の高い農業生産方式の導入の促進を図るための措置に関する事項

1 土壌診断の励行

たい肥等の有機質資材の適切な施用を行うためには、土壌診断を実施し、その結果に基づき、たい肥等の施用量を設定することが必要である。

このため、農業改良普及センターにあっては、詳細かつ迅速な土壌診断と、それに基づく確かな土づくり方法を指導できる体制を構築する。

また、農業協同組合の営農センター等の土壌診断施設においては、農業改良普及センターとの連携を図りつつ、適切な土壌診断を行う体制の整備を進める。

持続性の高い農業生産方式に取り組む農業者は、このような土壌診断体制の積極的な活用を図るとともに、施肥量の決定等に関し、普及指導員等から診断結果を踏まえたアドバイスを受け、土壌の性質の改善と施肥の合理化に努めることとする。

2 きめ細やかな施肥の実施

局所施肥を的確に実施するため、側条施肥機等により機械施肥をする場合には、肥料の種類、粒径に合わせた量を均一に施肥することが必要である。養液土耕栽培を実施する場合、土壌分析に基づく施肥設計と作物の生育にあわせた生育ステージごとの給液管理が必要である。

また、肥効調節型肥料の利用に当たっては、肥効発現の速度程度が異なるものが多数流通しているため、土壌条件及び栽培する農作物の吸肥特性に合致した肥料の適切な選択が行われる必要がある。

持続性の高い農業生産方式に取り組む農業者は、農林水産技術総合センターや農業改良普及センター等において行われた試験研究結果、実証ほ結果等や、各地域の土壌の特徴、気候等に適合した局所施肥及び肥効調節型肥料の施肥法に関する情報を最寄りの農業改良普及センター、農協等を通じて入手し、十分活用することとする。

3 入念な観察に基づく的確な防除の実施

農家が持続性の高い農業生産方式を続けるためには、より高精度できめの細かい病害虫発生予察情報が提供されることと、防除の要、不要を判断できる病害虫の発生状態（要防除水準）の把握が重要である。

持続性の高い農業生産方式に取り組む農業者は、このような発生予察情報を有効に活用するとともに自己のほ場の状況を入念に観察し、それに基づく生物的防除・物理的防除・耕種防除等の効果的な実施に関し、改良普及員、病害虫防除所職員等による巡回指導を活用する等適宜アドバイスを受けることとする。

また、病害虫が発生しにくい栽培方式を日常の営農体系に組み込むよう心がけることとする。

第3 その他必要な事項

1 土壌の性質の総合的な改善

たい肥等有機質機材の施用は、土壌の性質の総合的な改善を行う最も有効な手法であるとされているが、土壌の物理性の根本的な改善や酸度矯正のためには、たい肥の施用だけでは不十分である。

酸度矯正や土壌養分の補給を行うには、「ひょうごのやさしい施肥・土づくり推進」に示された土づくり肥料の施用方法を参考にする。

土壌の物理性の改善には、駆動型のディスクハローなどプラウ等の深耕機によって、水田では15～18cmの深耕を行う。水田での畑利用においては、本暗渠の施行を行うか、施行されていない場合は、3～5m間隔に排水溝を設けたり、高畝、深耕等により排水を促進する。

なお、県内の各地力増進地域において地力増進対策指針が定められている場合にあつては、持続性の高い農業生産方式に取り組む農業者は同対策指針の内容に即した改善方策を行うこととする。

2 必要な機械、資材等及び資金の調達

持続性の高い農業生産方式の導入には、新たな営農用機械や資材等を整備する必要があることがある。これらの機械・資材は、慣行の生産方式の実施に用いるものと比較して、高価であるだけでなく、その利用に関しても高度な技術が要求されるものであることから、個々の農業者の経営内容や技術水準を見極めつつ、導入を行うことが肝要である。

また、これらの農業機械、資材等を整備する場合には、取組の初期段階における経営的な負担の軽減を図る観点から、必要に応じ、国による無利子貸付資金である農業改良資金その他の融資制度を積極的に活用することとする。

3 関係補助事業の積極的な活用

持続性の高い農業生産方式に地域全体で取り組む場合には、農業改良普及センターによる濃密指導や実証ほの設置等による技術の確立、たい肥舎等共同利用施設の建設による生産条件の整備等を推進することが肝要となることから、これらを総合的に実施するため、必要に応じ、関係補助事業を積極的に活用することとする。

第4 持続性の高い農業生産方式の定義等について

土壌の性質に由来する農地の生産力の維持増進、その他良好な営農環境の確保に資すると認められる合理的な農業生産方式であつて、法律で定められた(1)たい肥等施用による土づくり技術、(2)化学肥料低減技術、(3)化学農薬低減技術の3つの技術のうち、省令で定められた具体的技術の中から最低1つ以上ずつ選択し、3つの技術すべてを導入した生産方式とする。

○持続性の高い農業生産方式を構成する具体的な技術の内容

技 術 名	概 要
(1) たい肥等施用による土づくり技術	
①たい肥等有機物資材施用技術	土壌の調査を行い、その結果に基づきたい肥等有機質資材を施用する技術
②緑肥作物利用技術	土壌の調査を行い、レンゲ等の緑肥作物を栽培して、農地にすき込む技術
(2) 化学肥料低減技術	
①局所施用技術	化学肥料を作物の根の周辺の肥料が利用されやすい位置に集中的に施用する技術
②肥効調節型肥料施用技術	肥料成分が溶け出す速度を調節した化学肥料を施用する技術
③有機質肥料施用技術	なたね油かす等の有機質肥料を化学肥料に代替えて施用する技術
(3) 化学農薬低減技術	
①温湯種子消毒技術	温湯に浸漬することにより種子に付着した有害動植物を駆除する技術
②機械除草技術	機械を用いて、有害植物（有害動物の発生を助長する植物を含む。）を物理的に駆除する技術
③除草用動物利用技術	アイガモ、コイ等を水田に放飼し、除草を行わせる技術
④生物農薬利用技術	天敵等を利用し、病害虫を駆除する技術及びバンカー植物（天敵の増殖及び密度の維持に資する植物）を栽培する技術
⑤対抗植物利用技術	土壌の線虫の生育を妨げる物質を分泌する植物を栽培することにより、当該線虫を駆除する技術
⑥抵抗性品種栽培・台木利用技術	病害虫に対して、抵抗性を持つ品種を導入し栽培、又は台木として利用する技術
⑦天然物質由来農薬利用技術	有機農産物の日本農林規格（平成 17 年 10 月 27 日農林水産省告示第 1605 号）別表 2 に掲げる農薬（有効成分が化学的に合成されていないものに限る）を利用する技術 有効成分が化学的に合成されていない農薬とは、有効成分が全て天然物質又は 化学的処理を行っていない天然物質に由来する農薬をいう。本技術は、農薬を利用するため、農薬取締法を遵守した使用が行われるよう十分留意するとともに、利用する農薬については有効成分が化学的に合成されていないものであることを製造メーカーへの問合せ等により確認する必要がある。
⑧土壌還元消毒技術	有機物を施用するとともに、土壌中の水分を十分高めた上で、資材により被覆した状態を継続し、土壌中の酸素の濃度を低下させることにより、土壌中の有害動植物を駆除する技術
⑨熱利用土壌消毒技術	太陽熱や熱水を利用して土壌に熱を加え、土壌中の病害虫を駆除する技術
⑩光利用技術	反射資材、黄色灯、ラノテープ等を利用し、病害

	虫を誘因し、もしくは忌避させ、又は生理的機能を抑制する技術
⑪被覆栽培技術	べたかけ栽培、雨よけ栽培、トンネル栽培、袋かけ栽培、防虫ネットにより農作物を有害動植物の付着を防止するための資材で被覆する技術
⑫フェロモン剤利用技術	害虫のメスが放出するフェロモンを利用し、オスをトラップで捕殺したり、交信を攪乱する技術
⑬マルチ栽培技術	田畑の表面を紙、フィルム等で被覆し雑草の発生を抑制する技術